

Fate Zero ~boy~

KEY (ㄸS)

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

王様ランキングがアニメ化した記念に、
Fateとのコラボ作品

時系列的には

王様ランキングキャラは原作の第一部後（※ボツス王国編後）

原作のネタバレあるので注意

王様ランキング、数年前からずっと応援していて
ついにアニメ化されると聞いて思わず投稿

以下、あらすじ

「ははははは!!!体は小さいのに夢が大きい奴だな!!!
良かったら世の軍門に下らぬか?!”

「ああ。そうだ。私は……私は……
ジャンヌを……。」

「気にしないで。」

「私ね。貴方みたいに優しい娘がいるの。」

・・・出会えたらきつと、
二人とも仲良くなれると思うわ。」

「——ふん。二度は言うまい。

・・・世界一の王になるという貴様の”夢”。
叶えるためにはせいぜいあがくことだ。
・・・その在り方、決して失うなよ。」

「——私のために泣いてくれるのですか?・・・ありがとう・・・」

『大丈夫』

『大丈夫だから』

『貴方は貴方の儘で大丈夫です』

『ボツジ』

『ボツジ様』

『兄上!!!』

『ボツジ王子!!!』

『——ボツジ!!!!!!』

——これは、小さな小さな体に、
大きな大きな勇気を持つ、

世界一の王様を目指すとする少年の物語である

KEY
(F
(S

|

0
0

”
B
O
Y
”

|

目
次

|
1

水銀の礼装、”月霊髓液”を駆る負傷したケイネスと、それを護らんと駆け寄るランサーが

「フハハハハハハハハハハ!!!」

この程度の”泥”で、我を飲み込めるとでも思ったか!!!!」

右手に至高の剣を起動させた黄金の王が、

その乖離剣から発する衝撃波によって、黒い津波を押し返す。

「

……星の息吹よ……今一度その力を貸したまえ……!!

……;”———エクス・カリバー!!!」

星の光を放つ聖剣の騎士王が、あるべきもののために”最期の力”を振り絞る

———征服王は”同盟者”のために

———湖の騎士は”贖罪”のために

———暗殺者は”マスターの願い”のために

———槍の騎士は”騎士の誓い”のために

———英雄王は”新たな愉悅”の征く末のために

———騎士王は、”恩”を返すために

息を切らしながら、少年は走る。

少し力を加えれば折れてしまいそうな、とてもとても細いレイピア

を

右手に、目的地に。

一歩でも多く、少しでも早く。

そこにたどり着くために。

「『ボツジ様!!!』」

『ボツジ殿!!!』

『兄上!!!』

「——いいいいつけええええええ!!ボツジイイイイイ!!」
「あう!!!」

”彼”の、誰よりも大切な”ともだち”は彼の背中を押す。
これまでそうしてきたように、これからも。
彼らが彼らであり続ける限り。いつまでも。

第四次聖杯戦争。

それは、各々が自分の”願い”をかなえる物語である。
話はエピローグよりも少し前にさかのぼる。

◆ 「はあく。今日も仕事かあ。」

会社の呼び出しを受けて休日出勤をしていたら、いつの間にか夜に。

とぼとぼと帰路につきながら家に帰って何を食べようかを考える。
とはいっても、料理もできないし、総菜をスーパーで買うか、
どこか店で食うか、いつそカップ麺で済ますかぐらいしかないが。
我が人生、我ながら侘しいものである。

いつものように一人だけの家で、ご飯食べて、明日の仕事備えて、
寝て、また起きて……。
想像したら泣けてきた。

(働きたくねえ……。……ん?)

腹が減ったので、とりあえず先ほどコンビニで買った
ホットスナックが入った袋から食べ物を取り出して食べようとする
と、

通りがかった公園で黒い何かがうごめいているのを見つけた。
夜の闇にまぎれ、それは目を凝らさないと見えないほどうまく溶け
込んでおり、

すぐに視界から離れ、消え去ってしまう。

(なんだ?)

疑問に思ったことはすぐにどうでもよくなった。

——なぜなら、俺が大切に持っていたホットスナックが入ったレジ
袋が、

いつの間にか背後から迫っていたその黒い何かに奪われたからである。

「あっ!!?・・・おいこらあっ!!!」

「——やっべ!!」

空耳だろうが、誰かのそんな焦ったような声が聴こえるもそんなのは重要じゃない。

俺の食べ物を奪ったであろう下手人をとつかまえ、楽しみにしていたホットスナックを味わうほうが一大事である。

しかし、勢いよく走り出したはいいものの、まさかの短距離走ではなく、持久走。

一向に縮まない現状に心が折れそうになる。だが、諦めてたまるか。あれは俺のモノだ。

精一杯息を切らして走り続けると、潮の匂いが鼻につきはじめ、あれが港らしき場所に向かっていることを知る。

(・・・なんでこんなことのために、こんなところまで・・・)

・・・ああ・・・)

今日はなんて厄日だ。



その日は何ともないありふれた一日だった。

陽はさんさんと降り注ぎ、雲が空を泳いではどこか遠くまで出かけ、

鳥たちはその翼で大空を駆け巡り、虫が鳴き声を響かせ、

人々は忙しく道を歩き、今日の一日を送るために働き続ける。

時刻は夜。陽は完全に沈む切、人々はそろそろ寝る時間にて、某所の港にて、それらは対峙していた。

現代社会ではありえない恰好をした中世の騎士の恰好をした

金髪碧眼の美少女。両手で透明の”何かしら”をしつかりと握りしめ、

対面の黒子が印象的な槍を持つ美丈夫に斬りかかる。

「はあっ!!!」

「ふうふう!!!」

つばぜり合いなどというものでもなく、お互いの武器が接触した瞬間、

金属の甲高い音がガキイ、と鳴り響き、互いにはじかれる。

次いで、先手を取ったのは金髪の少女。

相手が槍を構えなおすより先に、男に再び袈裟切りを浴びせんと、武器を振り下ろすも、ほんの少ししならせた槍によっていなされ、体制を崩される。そこをもう一つの槍で突くと、わかつていたかのように、

自ら大きく更に身を崩すことで回避し、剣で槍を弾いた。

「.....」

「.....」

お互いに警戒しながら相手を睨みつけるように注視し、相手の一挙一動から目を離さないよう構える。

実力は拮抗しており、何かのきっかけがなければ

この均衡が崩れることもまた考え難い状況。

が、すぐにその何かはやってきた。

「双方、ひけい!!!」

自らの真名を暴露しながら、それまで戦っていた両者の間に割って入り、

あまつさえ自分の軍門に下らないか提案とも言えない稚拙な勧誘をする男、

イスカンドル。

が、その覇気には一切の曇りなく、彼が王たる証拠となっていた。

提案を一蹴されても、全く気にせずになり方が揺らがぬその姿に、隣にいたマスター、ウェイバー・ベルベットはため息をつく。

そして、イスカンドルは雷鳴のごとき雄たけびを上げ、咆哮を轟か

せる。

「聖杯に招かれし英霊は、今ここに集うがいい。なおも顔見せを怖じるような臆病者は、征服王イスカンドルの、侮蔑を免れるものと知れ！」

普通はこんなことを言われたところで、姿を見せる者など居はしない。

そう、普通であるならば。だが。

まさか、この我を差し置いて、

「王を自称する者達がいるとはな。」

金色の粒子と共に、黄金の鎧を身にまとった一人の青年が、電灯の上に姿を現した。

音もなく、何の予兆もなく、彼はそこに立っていた。

各々がその存在感に身をこわばらせ、緊張がほとばしる。

重圧感が辺りに漂い、息が苦しくなるような空気へと変貌する。

「が、無言で彼は両腕を組んだ状態のまま片目を閉じて、

何かを見定めるように金髪の少女でもなく、

槍を携えた美丈夫でもなく、イスカンドルを名乗る

巨漢でもなく

——その奥にある、とある小さな人影を彼は”視た”。

「っ。フハハハハハハハハハハ!!!」

気が狂ったかのように彼は笑い出し、愉快に、けらけらと笑い続ける。

面白そうに、これ以上なく上機嫌に。

その様子を見た他の者達は当然、気がふれたのかという突然のその英雄王の様子に、眉を顰める。

「なんだあ?急に現れたと思ったら、突然笑い出しおつて。」

・・・で、一体どうしたというのだ？ 貴様も、見たところ名のある英霊らしいが。」

「クッククックク・・・。いつもであれば、

我の名を知らぬと申すその不敬。

万死に値するが今日は機嫌がよい。

・・・その前に、もう一人。

いや、もう一人と”一体”にその姿を現させないとな。」

「・・・何？」

「・・・どういうことだ？」

金髪の美少女、セイバーと、槍を構えるランサーが同じように疑問を呈する。

この場にいるのはセイバーの主人である銀髪の美女。

それを除けば後はサーヴァントと呼ばれる英霊たちのみ。

「……そら。」

黄金の王が右手を掲げると、彼の背後から大量の武器が姿を現し、射出される。

その先にはコンテナが在り、着弾した武器が鉄の箱を容易に破壊していく。

隠れる場所などないと言わんばかりの雨あられの武器があらかた発射され、

辺りに粉塵と煙がもわりと立ち上る。

「……………ししししし、死ぬかと思ったああああ!!!」

———そんな声が辺りに響いたと思うと、黒い”それ”は、素早く動き、夜の闇に溶けるようなその姿を現した。

「……なっ?!」

誰かの驚いた声も無理もない。

そのの見た目は、妖怪のような、明らかに人間離れした見た目だった。

黒い水たまりのような姿かたち、目が二つ。
手のようなものが体の両横についており、口らしきとげとげの牙が
見えてもいる。

が、驚きはそれだけではなかった。

彼を庇うように、小さな人影が立ちはだかる。

——頭には王冠を。

背中にはマントをはためかせ。

身長は130cmもないような低身長で、見るからに非力そうな小
柄な体躯。

現代の人間はあまり来てなさそうな青色の昔ながらの服に、
白のズボンの恰好。時代錯誤的だが、独特の恰好をした

サーヴァントばかりのこの場には上手く馴染んでいた。

「おおおおおい、ボツジ!!!逃げようぜ!!!」

ヤバそうだって!!!」

「……!!」

「こつ、子供?!」

「黒い妖怪と……子供?」

また驚きの声が上がると同時に、

黄金の王、ギルガメッシュは口元を吊り上げ、

再度自身が持つ宝物から武器を放出せんと

右手を掲げる。

「フハハハハハ!!!ハハハハハハ!!!」

これはこれは!!!剣も持てぬ非力な童に、

面妖な姿と化した妖とは!!!」

「な、なんだよあいつ……。いきなりたつくさんの

武器を降らせてきやがって……!」

俺の経験上、絶対ヤバイ奴だぞ!!ボツジ!!」

ぐいぐい、とその黒い影がボツジと呼んだ

少年の服を引っ張りながらそう抗議の声を上げる。

港で突如始まった騒乱を陰から見守っていた彼らからしてみれば、

いきなり襲われた形ともなる武器の雨あられ。

「セイバー。あの子たちは一体……？」

「……わかりません。」

セイバーは思考する。見たところ普通の子供と、幻想種が使い魔らしき”影”の生き物の事を。

見たところ、”影”らしきものは人外であることは間違いないが、さしたる脅威は感じ取れなかった。

(……何だ？この、嫌な予感は……)

だが、彼女のスキルの一つである”直感”は、

その少年に対して警鐘を鳴り響かせていた。

一瞬、そのボツジと呼ばれていた少年が山よりも大きく見える

幻影が映ったが、すぐに彼の姿は元の小さな形に戻り、

セイバーはそれがただの気のせいであると言いつけさせる。

「何、遠慮するな。」

……”無敵の男”を倒したその力、この我に見せてみよ!!!」

「く、来るぞボツジ!!!」

「あう!!!」

——かくして、ここに一つの新たな物語が始まることとなる。

決してあり得ない異世界からの来訪者2名が、この聖杯戦争をどう引つ掻き回していくのか——

それは、誰にもまだ分からない——